

地中から噴き出す高温の熱水と蒸気を利用する地熱発電。太陽光や風力のように天候に左右されない常用電源で、東京電力福島第1原子力発電所の事故を契機に再評価の機運が高まっている。地熱研究会（東京・



中央)は地層の調査研究や最新の発電技術などをワークショップ形式で発表。地熱ビジネスの推進役となっている。

同研究会はエンジニアリング会社のほか東芝など発電プラントメーカー3社を含む計16社が参加。大学研究者や経済産業省も交わ

(東京)

地熱研究会



左から田籾、安達、中田の各氏

コストや規制、壁突破へ熱く

り、年3回の研究発表や、技術紹介、現場視察などを行う。

九州電力子会社で地熱開発の技術支援を手掛ける西日本技術開発(福岡市)の田籾(たごもり)功一

部長(56)は、地熱開発コプラントの世界シェアは7割。随一の技術を宝の持ち腐れにすべきではない」と田籾氏は主張する。田籾氏が「歯に衣(きぬ)を着せぬ物言いで、国などへの政策提言にも熱心」と話すが、三井金属子会社で蒸気供給を手掛ける奥会津地熱(福島県柳津町)の安達正敏社長(62)だ。熱水や蒸気がたまる貯留層の温度や圧力など「複雑に入り組んだデータを読み解き、蒸気エネルギーというパズルを完成させていくのが醍醐味」という。国内外で金や亜鉛の鉱床探査にも携わり、熱水の化学成分の分析にも定評がある。みちのくで東北電力と地道に地熱発電に取り組んできた。今、「九州とともに地方から日本のエネルギー政策を変えたい」と語る。地熱技術開発(東京・中央)の中田晴弥社長(58)は井戸の掘削技術などで業界をリードする立場。研究会で事務局を務め、法規制に対応した開発計画や効率的な発電技術などホットな研究テーマを探したり、現場視察の段取りを整えるなど裏方として支える。

九州大学で地熱工学を専攻し、入社以来一貫して地熱畑を歩んだ「地熱マン」。地熱(福島県柳津町)の安達正敏社長(62)だ。熱水や蒸気がたまる貯留層の温度や圧力など「複雑に入り組んだデータを読み解き、蒸気エネルギーというパズルを完成させていくのが醍醐味」という。国内外で金や亜鉛の鉱床探査にも携わり、熱水の化学成分の分析にも定評がある。みちのくで東北電力と地道に地熱発電に取り組んできた。今、「九州とともに地方から日本のエネルギー政策を変えたい」と語る。地熱技術開発(東京・中央)の中田晴弥社長(58)は井戸の掘削技術などで業界をリードする立場。研究会で事務局を務め、法規制に対応した開発計画や効率的な発電技術などホットな研究テーマを探したり、現場視察の段取りを整えるなど裏方として支える。

地熱研究会のワークショップで、蒸気エネルギーというパズルを完成させていくのが醍醐味」という。

国内外で金や亜鉛の鉱床探査にも携わり、熱水の化学成分の分析にも定評がある。みちのくで東北電力と地道に地熱発電に取り組んできた。今、「九州とともに地方から日本のエネルギー政策を変えたい」と語る。地熱技術開発(東京・中央)の中田晴弥社長(58)は井戸の掘削技術などで業界をリードする立場。研究会で事務局を務め、法規制に対応した開発計画や効率的な発電技術などホットな研究テーマを探したり、現場視察の段取りを整えるなど裏方として支える。

地熱発電の課題は高いコストと、国が法律で利用の促進を義務付ける「新エネルギー」に位置付けられず、開発に時間がかかる点だ。原発事故後は「問い合わせや勉強会の依頼が増えている」(中田氏)という。産官学の知恵と技術をどう生かすか。メンバーたちの熱気も高まっている。(西部支社 上阪欣史)